

# エコシステム

Ecosystem  
Conservation  
Society-Japan

7

No. 194

July  
2024

## 花咲き、 昆虫集うゴルフ場

- | 減ってしまった草地
- | ドイツのゴルフ場での取り組み
- | 季節の花が揺れるゴルフ場
- | 生物多様性を守るゴルフ場の認証制度
- | 失われた在来草地の回復を目指して

ドイツのバイエルン州では、ゴルフ場でも昆虫など多くの生きもののために野草を増やすプロジェクトを行っています。また日本では、在来の生きものと共存しているゴルフ場を評価する「G認証」制度が生まれました。

In Bavaria, Germany, projects to promote biodiversity especially native insect species by increasing native wild flowering grasslands are implemented on golf courses. In Japan, "G Certification" has been created to evaluate golf courses that coexist with native wildlife species.

# 減ってしまった草地

幼い子どもが原っぱを駆け巡り、バッタとりをする…。

この光景が自身の記憶として蘇るのは、ある一定の年齢以上の人たちかもしれません。

日本の草原は、100年前と比べ激減しています。

このような環境下でゴルフ場の草地としての側面が注目されています。

## 多様な草地環境

日本の気候では、ほとんどの草原は森へと遷移していきます。ただ、なかには高地のお花畑や高層湿原、山のいただきや稜線付近だけでなく、海岸にも広がる風衝草原など、その厳しい環境から森林に遷移しない草原もあります。

また、何らかの要因で見られる草原には、噴火や山火事、雪崩や土砂崩れといった現象の後に生まれるものもあり、その後の遷移の速さは状況により異なります。さらに、川の氾濫のように毎年起き、維持される草原もあります。これらの自然現象によるもののほか、人が継続して利用や管理を行うことで、維持される草原があります。

## 激減した草原と生態系

草地は氷河期から存在し、100年ほど前は国土の約10%を占めていましたが、今では国土の約1%にまで減っています。森林に遷移したり、草地の人工林化、都市化による埋め立てなど直接的な開発もありますが、ここまで減った一番大きな理由は、時代とともに人が草を利用しなくなったことにあります。

かつては、屋根の材、牛や馬の飼料、畑の堆肥などとして、草が利用されて

きました。茅場、<sup>まぐさ</sup>秣場から生活に欠かせない草を得て、火入れなどの管理をしながら草原を維持してきました。

現代の日本は、屋根に茅が使われることはほぼなく、牛や馬はトラクターに、そして堆肥は化学肥料に置き換わりました。

草原を生態系という観点から見ると、例えばチョウやガの幼虫がススキなどイネ科の植物の葉を食べ、成虫になれば吸蜜源となる花で吸蜜し、花粉を媒介します。またそこにはそのチョウやガを食べる昆虫やクモ、両生爬虫類、小鳥類、さらにそれらを食べる猛禽類や哺乳類がいます。かつてはこうした草地の生態系が広がっていました。しかし、草地の激減により、草地に依存する生きものたちも数を減らしています。

## 草地としてのゴルフ場

明治時代には国土の約10%あったとも言われる草地環境がわずか1%に減った今、かつて自然破壊の象徴とされたゴルフ場に注目しました。ゴルフ場は草地を含むまとまった緑地であり、生物多様性を支え得る環境と考えられます。

ゴルフ人気のピークは20年ほど前だったものの、コロナ禍で再び注目を

集めるようになりました。ゴルフ人口、ゴルフ場の数が共に抜きこんでいるのはアメリカですが、日本もゴルフ場の数では、世界で2位とも3位とも言われています。

現在、国内のゴルフ場の面積は約24万haで、国土の約0.6%を占めま



草地の生態系が失われつつあり、草地に依存する昆虫にとっても大きな問題です  
写真左からトモンハナバチ、ジャノメチョウ、マツムシ

す。ゴルフ場でプレーするエリアは、もちろん、芝がかなり短く刈り込まれているため、生きもののすみ場所としては適していませんが、いわゆるOB（プレー区域外）をはじめとした、プレーへの影響が小さいエリアもかなりの面積を占めているため、こうした空間を活用することで、昆虫や小動物を支える環境を増やすことが可能です。また、ゴルフ場は夜間閉鎖され、人の立ち入りがなく照明がつかないことも、野生生物にとっては好条件と言えます。

2030年までのネイチャーポジティブの実現、また30by30目標達成のためにも、ゴルフ場の自然に着目し、い

かにその環境を改善できるかが重要になってきます。

今号では、ゴルフ場を生物多様性に

貢献する場に行っている優良な事例の紹介を中心に、今後どのような可能性があるのかを探ります。



写真上：ゴルフ場のチガヤ草地。外来種もありますが、足元にはワレモコウ、ツリガネニンジン、ミツバツチグリなど、在来野草がひしめき合っています（湘南CC）  
写真下：かつてはよく見られたススキ原

# ドイツのゴルフ場での取り組み

ドイツのバイエルン州環境・消費者保護省は、州内の「生物多様性、特に昆虫の保護の促進」を目標に、「野の花協定」というプロジェクトを行っています。ここでは、野の花協定を締結し「野の花咲くゴルフ場賞」を受賞したゴルフ場を紹介します。

## バイエルン州の野の花協定

2017年、ドイツ国内の調査で、過去27年間で飛翔性の昆虫の量の75%以上が失われたという研究結果が発表されました。<sup>※1</sup>この衝撃的な事実、連邦政府は翌年、昆虫のこれ以上の減少を食い止めるべく、生息環境の改善や再生とネットワーク化、農薬の使用削減や光害対策など具体的な施策を盛り込んだ「昆虫保護行動計画」を策定しました。この計画の内容で、後に上位法である自然保護法が改正されました。(詳細は本誌2022年5月号参照)

ドイツ南部に位置するバイエルン州では、昆虫の個体数と多様性の回復を目的として、2018年に「バイエルン野の花協定」が創設されました。<sup>※2</sup>

主に昆虫の生息環境を増やすため取り組みが行われていますが、生物多様性を豊かにすることも狙いの一つです。この協定は、市民や自治体だけでなく、農業関係者、企業も対象となっています。

※1 Hallmann,CA;Sorg,M;Jongejans,E;Siepel,J,H; Hofland,N;Schwan,H,"More than 75 percent decline over 27 years in total flying insect biomass in protected areas".PLoS One.2017 Oct 18;12(10):e0185809.doi:10.1371/journal.pone.0185809. eCollection 2017. PMID:29045418

※2バイエルン州の野の花協定に関しては、本誌次号以降にて報告予定

## ゴルフ場でも野の花協定

ドイツでゴルフ場が新設される場合、長く畑として利用されてきたような土地につくられます。これは、連邦自然保護法の中で、自然豊かな場所を破壊

して新設することは認められていないからです。

バイエルン州には約200のゴルフ場があります。バイエルン・ゴルフ連盟(会員数約14.3万人)は、それら全てが所属する統括組織として、先に紹介した野の花協定を締結しました。野の花協定には、通常、敷地の10%以上で野草を生やす等の条件がありますが、バイエルン・ゴルフ連盟は、協定に参加する条件としてゴルフ場内のオープンスペースの30%を野草の草地とすることを取り決めています。(ここでのオープンスペースとは、ラフ、樹林地、草地、水辺等の広範なエリアで、フェアウェイ、グリーン、クラブハウス、駐車場は含まれない)

現在、62のゴルフクラブが野の花協定に参加し、以下の基準を満たした運営に取り組んでいます。

1. ゴルフ場内のオープンスペースの最低30%を野草の草地とする
2. 草刈りは年1~3回にとどめ、分割

肥料や除草剤が入らない仕組みになっているピオトープ池





1

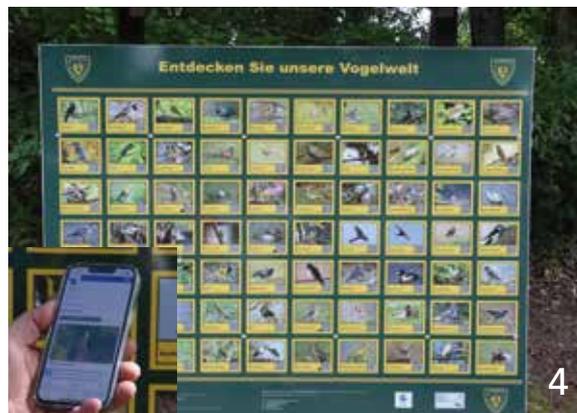
1. コウモリや小鳥用などのさまざまな巣箱。ゴルフ場には当たり前前の景色となっています
2. 昆虫のための虫宿も設置
3. 伝統的な品種のリンゴやナシが植えられたエリア。ヒバリが地面に巣をつくるため、草刈りは雛が巣立つ7月以降に行われます
4. 場内の野鳥紹介看板。レッドリストのカテゴリーもわかるほか、スマホで二次元コードを読み取ると、情報を見たり鳴き声を聞くことができます。
5. 場内では養蜂家が、咲いている野の花でハチミツを集めており、クラブハウスでも販売されています



2



3



4



5

して行い、常に一部を昆虫への食料供給のために刈り残しておく

3. 虫宿、立枯れ木、積み上げた枯木、砂地、石積み、水辺や湿地などが二つ以上ある

4. 化学農業を広範囲に使用しない。植物保護剤を使用する場合は、風で浮遊しないようにする

5. 効果的な防虫対策のために、自然を扱ううえでの意識改革と専門知識の普及を行う

ほか6項目

### 農地からゴルフ場に変わり、自然は豊かに

バイエルン州にあるゴルフ場「ヘルツォーゲンアウラッハ」は野の花協定に参加し、積極的な取り組みが認められ、2021年に「野の花咲くゴルフ場賞」を受賞しました。ほかにも40ク

ラブが同様の賞を受賞しています。

ここ、ヘルツォーゲンアウラッハは、2000年に農地だった場所を転用しゴルフ場をつくりました。農地だった頃に比べ、水質が年々改善されたため近隣の工場の用水として提供し、一つの収入源にもなっています。

野草の種は、植生を基にドイツ全体が17の地域で分けられた、地域在来の複数の植物の種セットが利用されています。木に関しても同じようにこの地域在来種を植えています。プロジェクトを行なううえで、専門的・技術的な知識に関しては、野の花協定のきっかけをつくったNGOバイエルン鳥類自然保護協会（LBV）が全面的に協力をしています。

プレーグラウンドの部分には、有機肥料や除草剤を使うこともありますが、

殺虫剤は一切使っていません。また除草剤等が池に流入しないよう、手前に浄化槽があり、池は雨水だけが入る仕組みになっています。

同ゴルフ場の責任者のベルント・デュルベックさんは、「この辺のゴルフ場は大なり小なりこうした取り組みを行っています。プレーをしにきた人が、さまざまな取り組みのアイデアを得て、家庭に持ち帰って実践してほしい。それこそが、『このゴルフ場に野草が生えている』という事実よりも、意義深いことだ」と話します。

バイエルン州のゴルフ場では、9,300haにおいて、こうした動植物の生育・生息地となる取り組みが行われています。



夏から秋にかけてゴルフコース脇などで見られる植物たち。左からツリガネニンジン、オミナエシ、マツムシソウ、ワレモコウ(すべて神戸ゴルフ倶楽部)

# 季節の花が揺れる ゴルフ場

草地が国土の約1%にまで減った日本で、ゴルフ場は  
草地に依存する生物の生育環境や種子供給源になり得るのでしょうか。  
どのような草地の管理なら可能性があるのかを探ります。

## 歴史あるゴルフ場の可能性 神戸ゴルフ倶楽部(兵庫県)

日本のゴルフ場で植えられるのは主に野芝、コウライ芝、ベント芝などで、ほかの植物は基本的に「雑草」として扱われ、駆除の対象となります。しかし、この「雑草」と呼ばれる草花の中には、本来その地域の生物多様性を支える「野草」が含まれることも事実です。

この野草を大切にしているのが、六甲山の標高850mに位置し、初夏にはホトトギスやウグイスの音が響きわたり、秋にはマツムシソウやワレモコウ、ツリガネニンジン、リンドウ、オミナエシといった花が風にそよぐ、日本最古のゴルフ場、神戸ゴルフ倶楽部(以下神戸GC)です。

1903(明治36)年、同ゴルフコースは、六甲山のイギリス人の山荘を拠点とし、すべて人力でつくられました。重機による大規模な土地の改変がされなかった神戸GCには、昔ながらの植生が残されています。

兵庫県の歴史の古いゴルフ場5か所の植生と管理手法を調べた研究では、草刈り頻度が低く、かつ草丈が高い管理がされていることから、種

の多様性が高く、野草の生育場所や種子供給源に成り得るということがわかりました。こうしたゴルフ場には、全国および地域版のレッドリストに掲載されている絶滅危惧種をはじめ、多くの草原性植物が生育しています。<sup>※1</sup>

通常のゴルフ場では、ラフでも30mm程度の草丈で管理されますが、フェアウェイは25mm、ラフと斜面は90~100mmといった草丈で管理している神戸GCの生物の多様性は抜きん出ていました。ここでは今でもグリーンのすぐ脇の野草が残され、生きもののすみ場所となっていることがうかがえます。

グリーンキーパーを務める二森考秋氏によると、同ゴルフ場は昔から除草剤や殺菌剤を使っておらず、殺虫剤は一番濃度の低いものを年に2回だけ使用しているとのこと。近畿農政局、兵庫県、神戸市に報告が上がっている県内159のゴルフ場のうち、突出して使用量が低く抑えられています。標高の高さにより害虫も少なく、芝生の病気が少ないという環境も関係しているとのこと。

甲南女子大学の植物生態学が専門の松村俊和教授は、「調査をすると、良い環境の畦畔草原で見られる植物が見られます。ゴルフ場でこのような環境があることが素晴らしい」と評価しています。

古くからクラブメンバーの間では、季節によって野草の開花の情報を交換しあうなどして、プレー以外での楽しみを見出している人たちもいます。昆虫や野鳥だけでなく、ノウサギのフンやキツネの目撃情報もあり、野草だけではなく、さまざまな生きものを支えていることがうかがいれます。

※1 松村俊和(甲南女子大学),ゴルフ場の半自然草原を活用した生物多様性の保全,2000,文部科学省 科学研究費助成事業 研究成果報告書

## 自然環境保全に取り組んできた 湘南カントリークラブ(神奈川県)

神奈川県茅ヶ崎市にある湘南カントリークラブ(以下湘南CC)は、開場63年目のゴルフ場です。会員や保護団体、行政が協働し、地域の生物多様性を支える草地管理をしています。

2011年に開場50周年を迎え、「自然環境を守る」という基本理念が柱の一つとして掲げられました。それに伴い、会員で構成される「グリーン委員会」に、「環境部会」を設けることになり、この部会で自然保護に関する具体的な取り組みが検討されるようになりました。それにより自然に造詣が深い会員からの提案があり、2013年には全国のゴルフ場として唯一となる日本野鳥の会の法人会員となり、会員と従業員を中心とするバードウォッチングが行われるよ



左:コースで確認されたノウサギのフン 中:採草していた時代の境界石が残る 右:プレーエリア以外は草丈は高く残されています(すべて神戸ゴルフ倶楽部)

うになりました。

さらには、ゴルフ場としては利用されていない、貴重な自然が残るエリアを、茅ヶ崎市景観みどり課の職員岸一弘氏と市民有志が定期的に管理作業をしていた関係から、バードウォッチングは呼称を自然観察会に変え、このグループと協働で行われるようになりスケールアップしました。この定期的に管理されてきた場所は2014年に市からの依頼を受け特別緑地保全地区となり、市とゴルフ場が保全管理に関わる協定も結んでいます。

また、湘南CC会報誌において、岸氏がゴルフ場敷地内で見られる動植物を紹介しています。会員や従業員への理解が深まり、コース管理部も記事で紹介された野草は刈り残すなど、参考にしています。

副支配人の重田浩司氏は、「ゴルフプレーに支障のない樹林帯は、野鳥や小動物が隠れることができる草丈

を残し、『生物保護エリア』として環境保全に努めています。ミスをしたお客様には申し訳ありませんが、このエリアに入るとロストボールが強いられます」と説明します。概算としてゴルフ場全体の2.4%が野草を生やしている面積となっています。

「鬱蒼としてきたら60cmほどの高さを残して刈る」という管理方法で、環境により1年～数年に一度程度と、草刈りの頻度も異なります。乾燥した草地から、細流付近の湿った草地、樹林帯など、多様な環境タイプが存在しています。

チガヤ草地には、ススキのほか、ツリガネニンジンやワレモコウ、ミツバツチグリ、ヤマユリといった植物が、ほかにも樹木が点在する場所ではアキノタムラソウ、キンラン、コウヤボウキ、ヤマハッカなどが、また、プレーエリアに生えるクロマツの根元には、エゾスズランなど、さまざまな植物が見られます。

湘南CCは、貴重な種の新たな生育空間という役割も担っています。ゴルフ場内に生育するマメ科植物のクララを保護エリアに移植して増殖を試みたり、隣接する民有地の森林が墓地になってしまう際、市景観みどり課と協働し、ツリバナ、コクラン、キッコウハグマ、コウヤボウキ、カマツカといった種を湘南CC敷地内にも移植しました。

そのほかタヌキやノウサギはもちろんのこと、キツネも確認されています。市はトレイルカメラをつけて動物の調査も行っています。

ゴルフ場側は専門知識を持つ市職員や保護団体から生きものの保護や保全管理方法などの助言が受けられ、また市側もゴルフ場でありながら意図して貴重な植物を残し、保全や普及広報に協力してくれるというメリットがあります。お互いを必要とする良い関係性のなか、地域の自然が守られている好事例です。



左:敷地内のクララを移植し活着した生物保護エリア 右上:生物保護エリアではキンランが群生する場所もある(撮影:岸一弘氏) 右下:クロマツと共生するエゾスズラン(すべて湘南CC)

# 生物多様性を守る ゴルフ場の認証制度

(公財)日本生態系協会は、今年3月、日本の生物多様性にとって極めて重要な環境である「草地」をはじめとした二次的自然環境を、守り再生するための認証制度「G認証」を創設しました。

## G認証のコンセプト 在来野草などが生きられる 空間の回復

草地をはじめとした二次的自然環境の保全再生は、生物多様性を回復していくうえで重要です。草地環境の維持を常に行なっているゴルフ場やスキー場は、管理内容、ゾーニング次第で動植物の重要な生息・生育場所になります。(公財)日本生態系協会が創設したG認証の『G』は、「Grassland」「Golf Course」「Gelände」と、草地環境の頭文字から付けられました。

G認証では、単にゴルフ場やスキー場等の現状を確認するだけでなく、開発による環境変化についても整理、開示したうえで、在来野草や動物の生育・生息空間としての再生、生物多様

性の回復につながるような、管理区域や管理内容の見直しを求めています。

## ますます求められる企業の 生物多様性への責任

生物多様性の喪失による問題は、気候変動問題と両輪で解決していくべき世界的な課題です。

気温が上がりすぎ命の危険がある、気象が激しくなり洪水などが起こるといった問題や、植林をすることでCO<sub>2</sub>の固定を目指す取り組み等、気候変動に関する問題や取り組みは、私たち人間にとってわかりやすいものです。

一方、知らぬ間に身近な生きものが絶滅危惧種になっている、特定の種が地域絶滅しているといった問題は、直接人間への影響が見えにくいものの、

私たちが生物多様性から受けている恩恵は計り知れず、それだけに失われた時の影響は甚大です。

近年は先行して取り組みが進んでいた気候変動に追いつくように生物多様性への取り組みが進められ、企業もその責任を担い、情報を開示することが世界的な流れとなっています。

ゴルフ場は、世界的に喪失が問題となっている「草地」環境再生のポテンシャルをもった、注目すべき環境です。ゴルフ場の管理を生物多様性保全型にアップデートし、第三者機関による認証という形で対外的に示していくのは大きな意義があると言えます。

**G認証取得要件** 必須要件と選択要件があり、これらの要件をどのように満たしているかで評価ランクが決まります。

### 必須要件 A3

以下すべて満たした場合の評価ランク

#### 建設前後の環境明示

現在までの環境タイプ(広葉樹林・針葉樹林・草地・畑地・水田・水面・人工面等)の分布を地図化、面積割合の推移をグラフ化

#### 現状の管理確認

草刈りの時期・頻度・刈り高・農薬使用状況のパターンごとに地図化

#### 外来植物の抑制

認証後、外来種や定められた地域外からの植物(在来種含む)の不使用

#### 生物多様性保全型の管理

除草剤の不使用かつ、生物多様性保全型の管理区域が全体の5～10%

### 普及啓発

保全再生・管理計画の概要を施設内に掲示、取り組み紹介のサインを場内に設置

### 選択要件 A2, A1, AA3, AA2, AA1, AAA

以下を満たした場合(選択の内容により評価ランクは変動)

#### 生物多様性保全型の管理

農薬の不使用かつ、生物多様性保全型の管理区域の割合の設定

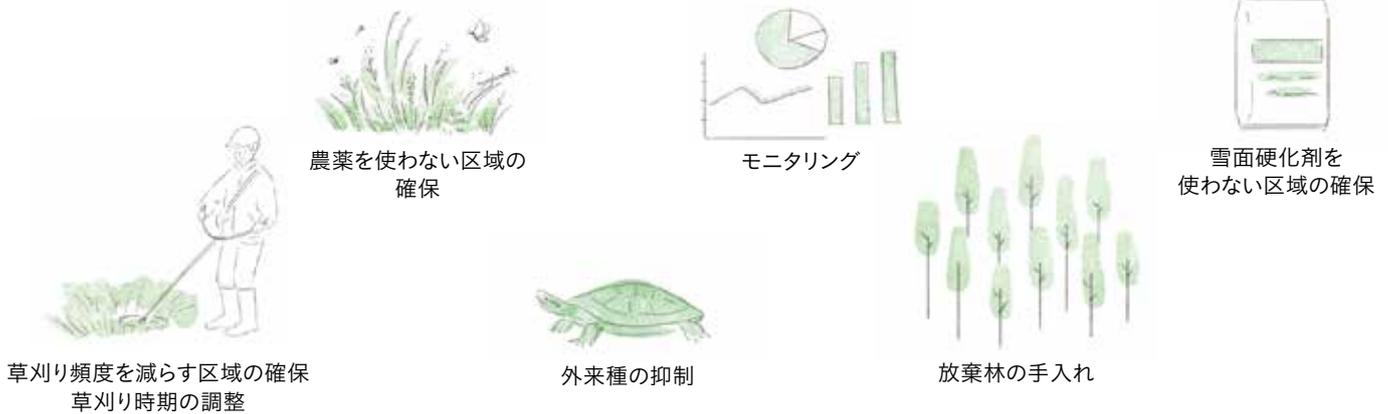
\*同管理区域の面積割合が増えるほど、評価ランクが上がる

#### 各種調査に応じた管理

優占種の状況を踏まえた管理、希少動植物等の生息状況を踏まえた管理、植物群落の状況を踏まえた管理

\*調査項目等が増えるほど、評価ランクが上がる

ゴルフ場(スキー場)での管理において、下記のような取り組みをすることで、生物多様性の質の向上につながります。



### G認証第1号 筑波東急ゴルフクラブ 東急不動産株式会社、東急リゾート&ステイ株式会社

今年3月、G認証第一号が生まれました。「筑波東急ゴルフクラブ」は、茨城県つくば市に位置する66.3haのゴルフ場で、かつては里山林として維持されてきましたが、50年前のゴルフ場建設に伴い、約50haの二次林が伐採、または管理停止されました。現在、敷地全体の4分の3が農薬散布を含む集約的管理によって、芝地環境として維持されています。

造成前からの環境の変遷と現在の管理内容をふまえ、OBライン沿いと3箇所の調節池、一か所の草地を合わせた約3.4haの区域については、これまでの管理方法を見直すことになりました。集約的な芝地管理から、草刈り頻度を減らし(2年に1回～年3回)、全敷地面積の5.1%において農薬の不使用、放棄状態にあったOBラインから外側2m内の樹林における下刈りの実施など二次林や二次草地的な環境を意識した管理方法への変更が決定されました。

これらの計画・取組が審査された結果、二次的自然環境を回復する第一歩として評価され、A3ランクとして認証されました。



申請区域。国土地理院撮影の空中写真(2021年撮影)を元に作成



OBライン付近では生物多様性保全型の管理を行う予定



クラブハウスではG認証取得についての説明パネルを掲示



ゴルフ場内の調整池に設置された取組み紹介のサイン



# 失われた在来草地の 回復を目指して

## ゴルフ場の新しい意義

ゴルフ場面積は、国土の約0.6%を占めます。森林部分やプレーエリアを除いた面積は、決して広いものではありませんが、それでも国土の約1%となった草原環境を補う可能性を秘めています。この草地は生物多様性を高め、それぞれの市町村レベルでも行うべき「ネイチャーポジティブの実現」に向けて、必要な環境です。これまで見てきた事例のように、プレーエリア以外の場所を在来植生による多様な草地環境として管理できるか、また農業などをいかに使わないかが鍵となります。

ゴルフ場関係者へのあるアンケート調査によると、30%の人が「自然環境の良さ」をゴルフ場選択のポイントにしています。さまざまな野草が生育していることに対して、「プレーの邪魔にはならない」、「見た目がよい」、「生物を保全している」というように、受け入れられる、もしくは好意的に受けとめられていると考えられるとの回答を合わせると、80%にもものぼりました。

※1

これからは、良好な管理下にあるゴルフ場の草地は、生物多様性を支える重要な役割を果たすことを周知していく必要があります。

※1 松村俊和(甲南女子大学),「ゴルフ場の半自然草原を活用した生物多様性の保全」,2000,文部科学省 科学研究費助成事業 研究成果報告書

## 欠かせない行政のバックアップ、 NGOの専門性

ネイチャーポジティブの前提となる30by30は、国だけでなくそれぞれの市町村においても、達成することが望まれます。生物多様性を保全するゴルフ場を増やすためには、ゴルフ場の努力だけでなく、行政や仕組みによる後押しが必要です。

同時に、開発行為に対して法律でしっかりしたミティゲーションが義務付けられていると、実効性が増します。これからは、自然を減らさない「ノーネットロス」は当然のこと、自然を増やす「ネットゲイン」でなければ、ネイチャーポジティブにはつながりません。

そのためにも現状把握の調査、また適切な助言が必要となります。各地域の自然環境に精通した保護団体等との連携、市民の参加も欠かせません。

失われた草地の回復のため、多様な主体の参加が必要です。日本各地で、季節の花が咲き、昆虫が集うゴルフ場が増えることが望まれます。

## Golf Courses with native flowering plants attract wildlife and insects.

100 years ago, in Japan contained ten percent of grasslands. Unfortunately, only 1% of the grassland still exists. Due to the loss of our grasslands, many species of plants and animals are now facing the risk of extinction. Efforts are underway to restore these habitats on golf courses where portions of this landscape are being converted and maintained as wild grasslands.

The Bavarian State Government in Germany has adopted a program called "Flowering Pact" designed to increase native wild flowering grasses' to promote biodiversity especially native insect species. Various stakeholders including citizens, local municipalities, golf courses and other businesses are participating in the program. The participating golf courses are supposed to keep at least 30% of their open spaces as native grass lands by limiting grass cutting activities to less than three times a year, and leaving portions of flowering grassland areas to benefit native insect populations. Of the approximately 200 golf courses in Bavaria, 62 golf courses are participating in this project.

Among them is the Golf-Club Herzogenaurach that received an award called "Flowering Golf Course" that spreads native wild grass seeds outside of the play areas, cuts grass only once a year to avoid wild birds nesting season and leaves some areas

without cutting at all. There are wetlands with aquatic plants and rough stone masonries that can be biotopes. Insect hotels, and nest boxes for birds and bats can be found various places in the golf course. The management also organizes an event for children to set up nest boxes for wild birds with expert explanation with QR Code. The management has been actively promoting the project.

In Japan, there are a few golf courses that have implemented programs that leave wild grass areas outside of the play areas without cutting, or set aside protected areas for wildlife. But these golf courses are the exception and not the rule. However, in March of this year, Ecosystem Conservation Society-Japan created a program to certify golf courses that restore good quality wild grass areas to protect wildlife. We are hoping that this system will stimulate many golf courses to apply for this certification and contribute to wildlife biodiversity.

The total area of golf courses in Japan equals 0.6 percent of the national land area while the remaining grasslands occupy one percent of the total Japanese land area. As Japan aims to achieve "Nature Positive" by 2030, golf courses are expected to contribute to this goal by providing good quality wild grasslands.



In Japan, the utilization of grasses has been drastically reduced as the economy changed. The remaining grasslands occupy only 1% of the Japanese land.



Golf courses can be used as "new grasslands".



The Bavarian State Government in Germany has adopted a program called "Flowering Pact" that encourages the restoration of wild grasslands to support native insect species.



The golf courses that participate in the Flowering Pact use a variety of methods to help insects.



There are a few golf courses in Japan that leave grass areas outside the play areas uncut, but they are still rare exceptions.